
王道

日々楽々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王道

【Nコード】

N4088B

【作者名】

日々楽々

【あらすじ】

完璧にありきたり（王道）なものだけにしようと思って書いたら、作者はコメディのありきたり（王道）をよく分かってなかったというバカな作者が書いた話。

始まりだけどやっば短すぎ? (前書き)

気分転換で書いてみました。まあたまにはこんなのもいいでしょ!

始まりだけどやっぱ短すぎ？

俺は桐島竜也きりしまたつや

今からありきたりでいて有り得ない俺の高校生活をここに記録する！

.....目ん玉かっぱじってよく見やがれ！

すんません。チョコシキました。

美人三人組ここに結集！こいつら何気に俺の席の周りだったりする（前書き）

なかなかコメディって慣れませんね。でも頑張って書くんで皆さん
ばんばん評価してって下さい！

美人三人組ここに結集！こいつら何気に俺の席の周りだったりする

今俺は走っている。

なんでだって？

知るか！作者が勝手に時計と自転車壊れたことにしちゃったんだよ！
今俺は自宅から全速力で走り続けて早15分（多分）。

まあぶっちゃけ普通そんなに長く全速力で走れるわけないけど小説だからいいらしい。

遂に学校が見えてきた。

そして校門には体育教師が竹刀を持って、まるで弁慶のように仁王立ちしている。

しかし、今学校の時計は太いのが8、長いのが5を指している。要するに8時25分！

……余裕で着いた！

時計を見た俺は15分間走り続けた疲れがどっと押し寄せてきて、その場に座り込んだ。

「桐島あ！！」

なんだよ……

「おい！桐島！」

だから何なんだよ……

「遅刻のくせに何へたりこんでんだ！」

「なにいいいいいい！！！！！！じゃあ時計は？！まだ8時半じやねえかよ！」

「あれ壊れてるんだよ！」

「はあ！！！！じゃあ何時なんだよ！！！」

「9時だ」

「じゃあいいや！今日はもうさぼろっ！」

「ほう。教師の前でよくそんなこと言えるなあ」

「じゃあさよなら！！！！」

俺の鼻からは留め止めなく赤い聖水が流れ続ける。

「あっ！ごめんね竜也君！」

そう言っただけでリムジンから出てきたのはストレートの髪を風になびかせて神秘的な雰囲気を出しまくっている………スタイル最高のスーパースタイル美人だった。

「大丈夫だよ。それより早く学校行ったほうがいいよ」

「でも、「でもじゃない！早く行きなさい！もう！ほんとに奈葉はとろいんだから！」

「いてえよ一美！」

「あっ！ごめんごめん！イタイイタイの飛んでけ！！はい治ったでしょ！二人とも早く行くわよ！」こいつはもうすこし………いやもつと人を労る大切さを学んだ方がいいと思う。まああったとき一目惚れしかけたけど………にしても………

「一美？」

「んっ？」

「俺だけこの待遇はひどくないか？」

今の俺の状況………髪の毛を引っ張られながらうつぶせの状態で引きずられている。

「どさくさに紛れて奈葉のパンツのぞいてるのが悪いのよ」

「しょうがないだろ！あの位置では顔上げたら嫌でも目に入るっての！」

「奈葉裁判長！被告は罪を認めました！求刑をお願いします！」

一美がズビシッ！という効果音が似合いそうない感じの敬礼をして言った。

「………判決、死刑」

「えええええ！奈葉！ちよつと待て！パンツ見たことなら謝るから！お願い許して！ちよつ！一美何すんだ！やめ！ぎゃああああ！」

一美は俺の髪を離し今度は逆に足を掴んで、砂利いっぱい校庭を駆け抜けていった。

「お前はもう、死んでいる」

「教室着いて言うセリフかよ!？」

「おお! まだ生きていたか、ならばしょうがないせめて最後は楽にしてやろう」

そう言っで一美は俺の方に人指し指を向けてきた。

なっ! 何をするんだ!？ どど○波?! デスビー○!？

「レ○ガン!」

「そっちか!?!？」

○イガンと言った一美の指から繰り出されたのは・・・目潰し!

「いでええええ!! ちよっお前目潰しはないだろ!?!？」

「目潰しではないレイガンだ!」

この娘・・・伏せ字解いちまりましたよ。

「おい! お前ら! うるさいぞ!」

「先生! だめだ! こいつに近づくな!・・・やられるぞ!」

「かめはめ波あ!」

「ごはっ!」

チーン♪

「何してんだよ一美!」

「・・・・・・テヘッ♪」

俺って体力あるなあ！ギネス級じゃねえか？（竜也）それはない（梨仔）（前妻

どうか！評価を！

俺って体力あるなあ！ギネス級じゃねえか？（竜也）それはない（梨仔）

俺は今、とちくもった一美に撃破された教師を背負って走っている。そして後ろには3人の教師達。

最初は5人だったが2人脱落した。

「しつこいっすよ！」

「なら諦めろ！今なら校庭300周で許してやるぞ！」

「0一個多いっすよ！」

「お前が我等がアイドル佐々木一美さんに罪をなすりつけようとしたからだ！」

そうなんだよ！皆さん聞いてくださいよ！

一美のやつ、最初に脱落した先生に「竜也がやりました」って言ったんですよ！

前回かめはめ波という名の掌底を放ったのは一体誰だったのかね？

「つーか！アイドルって！？あんたロリコンデスカ！？」

「ロリコンではない！ただし幼い娘が好きなだけだ！！」

「それをロリコンっつーんだよ！」

いったいこの学校は何でこんな変人ばかり多いのだろう。

まあどうせ作者の陰謀なんだろうけど。

「それになんでお前はこの学校の美女たちに囲まれてやがんだよ！どんな裏技使ってたんだよ！俺にも教えろ！」

先生には悪いがもう俺には走りながら叫ぶほどの体力が残っていない。

ああ、脇腹痛い。頭も痛い。腹も減った。気持ち悪い。

「もう終わりだな！挟み撃ちだ！！！」

くそ！でも疲れてたからちょうどいいかも。でも300周はなあ・・・。つーか300周って何だよ。今日中に絶対終わらないだろ！ああ・・・なんでこんなことになっちゃったんだ？

あっ！梨仔だ！何でこんなところにいんだ？それにあれ何持ってたんだ

? えっと・・・

「す、ず、き、さ、え?」

なんだこれ?

「しかし、反省したようだから今日の放課後職員室にこい! それだけで許してやろうじゃあないか!」

脱落者NO・2が言った。

「どうしたんですか先生? 顔が真っ青ですよ?」

「いいやなんでもないさ! 分かったか!? 放課後必ず来いよ!」
そう言って先生は去っていった。

後に残ったのは首を傾げる俺と先生たちと、普段見せないような怪しい笑みを見せる梨仔だけだった。

「って! よく考えたらまだ1時間目が終わったころじゃねえか!!
! このままじゃ二時間目も遅刻しちまう!!! 梨仔! 行こう!」

「・・・・・・お礼は?」

「えっ!!!? ああ、ありがとう」

そう言って何を言っているかは分からないがぶつぶつ言っている梨仔の手を引っ張って教室に向かった。

キーンコーンカーンコーン

スピーカーから間拔けな音が出たとき、俺はすでに教室についていた。

「ハアハアハアごほっごほっ!!」

まあ、疲れました。かなり。ゴホッ

「大丈夫?」

おお! 奈菜! 俺はお前の優しさがこれほどあったかいことを今初めて知ったよ!! お前の優しさは俺の学校生活での唯一つの・・・・

「オアシスだよ!」

「えっ? あっそうだね?」

「ああ! ありがとう! 俺はお前の優しさに、感動した!!!!!!」

「あっありがとう!」

そう言って奈菜は顔を赤く染めて下を向いた。

やべっ！かわいい！

「えっえええええ！?!?!? あっありがとう!!!!」

そう言っつて、奈菜は教室を出てどこかに行ってしまった。

「一美」

「なんだいこの女ったらし」

「なんだそりゃ? まあそれより、声に出てた?」

「やべっ！かわいい！ってやつ?」

「やっぱ出てたか……」

やべえ……一美の言う通り俺ただ女ったらしじゃん！

「ねえ、私にも言っつて?」

一美は笑顔でそう言っつてきた。

こいつはいつもこんなだったら誰でも惚れるくらいなのになあ。

「ホントに?」

「さっきのも出てたのか!?!」

「もちろん!」

「はあ……」

「まあいいじゃん! 言われるほうはうれしいんだから!」

ああ、やっぱもうそういうことは考えないようにしよう。うん! そうじゃないとまた一美からそんな恥ずかしい事をせがまれてしまう。そんなことを思っていると今度は梨仔がちかずいてきた。

「なんだ? 梨仔もそんなことを言われないのか?」

「……私の席ここなんだけど」

そうだった! こいつらは俺の席の周りだった!

えっ!?! 前回の題名に書いてあった? まあいいじゃあないか! そんな細かいこと気にするでない。

ついでに俺たちの席を説明すると、俺は窓側2列目の一番後ろの席。俺の左に奈菜、右に梨仔、前に一美だ。

そう、皆さんも少し想像すれば分かるであろう。俺の周りは一ハレム状態。そして俺の男友達、兼親友は一人だけ、そいつも俺の近くであり、俺の右前だ。

左前は今はいない。前はいたが、相当の不良で一人の少年に捕まっ
て今は少年院にいるらしい。

それにしても授業はじまんのおせえなあ。次なんだっけ？

「梨仔。次なんだっけ？」

「理科」

ああ。NO. 2か。何であんなに顔色悪かったんだろ？

「なあ梨仔、すずきさえってなんだったんだ？」

「あの教師の逆援相手」

逆援！??

「援交じゃなくて??」

「逆援」

世の中おかしいことになってんなあ。

警察の猥褻も多いし、ったく守る側が犯罪犯してどうすんだよ。

キーンコーンカーンコーン

「おっ！終わったか！」

鐘がなったと同時に教室にいるみんなが机を移動し始める。

そして弁当も・・・

「弁当！??」

「梨仔！今何時！!?」

「12時半」

うそ！?俺3時間も走ってたのかよ!?

どうりで頭痛かったり気持ち悪くなるわけだ。

「・・・どうしたの？」

「疲れた。梨仔できたら購買でなんか買ってきてくれないか？」

「いいよ」

そう言った梨仔に500円を渡し床に転がった。みんなの目が痛い
ががそれどころではない。

そこで俺の意識は消えた。

タイトに言われて

焼きそばを買ってきたのだがこれはどうしよう。

竜也は気持ちよさそうに仰向けに転がりながら寝ていた。

「かわいい・・・・・・」

近くからそんな言葉が聞こえてきた。

その方を見ると、案の定奈菜が窓から身を乗り出していた。

しかし、竜也は普段は鋭い目付きに色白な顔でいつもは大人っぽい雰囲気を出しているが、こう、無抵抗な寝顔を見るとかわいいというのは奈菜だけではないだろう。

私も不覚ながらそう思ってしまった。

しかし、やられっぱなしというのは嫌だ！

普段は冷静だがやられる側に立つのは断固拒否する。

「奈菜」

「なに？ 梨仔ちゃん」

「マジック持ってる？」

「ああ！ わかった！ 持ってくる！」

そう言って奈菜は私に笑顔を向けて走って行った。

奈菜は気付いていないのだろうか？ 奈菜が笑顔になるたびにその笑顔を見るために血走った目を見開き、男達が不埒な妄想をしながら鼻血を垂れ流しているのを。

・・・・・・ 気色悪い。

「梨仔ちゃん！ 持って来たよ！」

奈菜はいっ！ と言って私にマジックを渡した。

さて、起きた時竜也は誰を疑うかな？ まあ十中八九一美だろうけどそれはそれで面白いからいいや。

「奈菜。竜也と一美には内緒」

「なんで？」

「その方が楽しいから」

「わかった！」

さて、竜也、起きたらまた存分に私を楽しませてくれ。

まあパクリ多すぎだけど頑張って突っ走っていくからおくれんなよ！（前書き）

実際、パクリ多すぎだけどストーリーは全然違うものにする予定なので、安心して読んでください

まあパクリ多すぎだけど頑張っって突っ走っていくからおくれんなよ！

昨日は実に不愉快でした。

一美のやろう・・・俺の顔に落書きしたまましらきりやがって！
そうです。そうなんです！皆さん聞いてくださいよ！またまた一美
が俺にいたずらしやがって俺は一日中教室のみんなの笑い者だった
んだぞ！？

一体俺は何回アイツに人生狂わされてんのかね。小学生の時いじら
れキャラだったから中学入学したら普通の生徒になって普通の中学
生ライフをエンジョイするぜ！とか考えてたのによ！

・・・すいません。面白くもない愚痴ばかりに
なっちゃいました。

しかし！今日は昨日の仕返しにスピリチュアルアタックだ！無視し
てやるぜ！覚悟しろ！

今日は新しい自転車で登校。気分もよく、たくさん坂や曲がり角
という妨害を乗り越えていく。

途中でどこかの爺ちゃんが倒れていたが無視だ。猫が小学生を虐め
ていたが無視だ。さかりのついた犬がどこぞの美人のねーちゃんと
交尾していたがまたまた無視だ。・・・つーか突っ込みき
れねーし、最後のはちよつと見るのもおぞましい。

えっ？突っ込みそんなに上手くねーじゃんって？バカゆーんじゃね
え！！この小説突っ込み俺しかいねーんだからしよーがねーじゃん
！！俺だってボケやりたいんだよ！

なんでだって？だって楽じゃん？

そんな質問してないって？作者の320人中310位の頭の中では
聞こえたらしいよ？

よし、今はまだ8時15分今日は時計も持ってきて、さらに時間も
合わせたから遅れているなんてことはまず無い。そしてこの角を曲
がればすぐに学校。遅刻なんてことはまず無い。

昨日はチャリの突然のパンクで遅刻になっちゃったしな。今日こそは普通に登校してやるぜ！

そんなおよそ普通の人は考えないことを1・5秒で考えて角を曲がる。

しかしここで一つのお約束が発生、パンをくわえた美少女が

「遅刻！遅刻！」

と言いながらチャリに乗っている俺と衝突。

俺はサドルから解き放たれ、まるで無重力空間にいるように中を舞う。

俺は空中で気を失いかけながら昨日のクラスの皆の笑う顔を思い出す。

皆の笑う顔、顔、顔……何かむしようにハラが立って来たが、気を今にでも失う俺には全く関係ない。

俺はこのぶつけられない怒りにイライラしながら意識を手放した。

「……や……何かむしようにハラが立って」

ん？どこからか俺を呼ぶ声が聞こえる。

なんなんだ？俺はまだ寝たいんだ。邪魔するな。

「起きろ馬鹿竜也！」

その声の主は声からして知り合いじゃなかったらしいな〜と思う知り合いNO・1の一美か！

……やばい！この体勢は実にやばい！！このままだと跳び膝蹴り（落下バージョン）を食らいかねない！（こんな技があった気がするが思い出せない）

「馬鹿竜也！」

「とおおおう！ブアが！！」

変な叫びをあげながら床にヘッドスライディング！おかげで鼻から血が出た。……イタイ（ここで問題！俺は心の中で何回を連発したでしょう？暇なやつは感想にでも書いて）

そんな事を思っていると少し離れたところからボスッ！という音が鈍くしかし少し大きくこの部屋に響き渡った。

「……………チッ」

「……………いやいやいや！一美さん！そこで舌打ちしないで下さいよ！そんなタイミングで舌打ちしたら、当てる気だったと誤解されちゃうでしょ！メッ！わかったかずちゃん？メッですよ！

そんなことを俺が勝手に考えていると、一美が突然満面の笑みになった。

「わかったわ。おかあさん。おかあさんがそういうんなら、たとえどんな不条理で欺瞞に満ちた屈辱的で尚かつ最低な行為をこの身に受けたとしても、金と自信の欲望のためならどんな事でも受けましょう。だからおかあさん。おかあさんも私と一緒にこの不条理で欺瞞に満ちた社会を共に生きようではないですか！」

「……………いや、いきなりこの娘は何を言っているのでしょう。

「あの……………一美？いきなりど……………」

「ああ！ありがとうございます。おかあさん。あなたはご自身の身も考えずに私の盾となって下さるのですね？ありがとうございます！私あまりの感動にもう……………」

そういうながら俺に背を向けるような形でハンカチを顔に当てている。

「……………つかかなに？さっきのは？

何の身代わりなんだよ。

「では行きましょう！」

「はっ!？」

「行きますように言っているのです」

突然そんなことを言われても困るってもんだ。

「行くなって言っただってどこへ？」

「勿論天○銀次。通称『雷○』のいる無限城へ」

「・・・・・・は？」

いやそんなことを言われても、俺はそんな激しい動きが出来るわけでもないし、ましてや必殺技なんて持ってない。

そんな俺に何をしろってんだ？ 全く意味わかんねえ。

「なに考えているんですか？ 土度」

「土度って？」

「何言ってるんですか!？ 土度なんてぶっちゃけこの世に存在しないような名前なんて、あなたしかいないでしょう？」

いやゝ微妙ですこの展開。

いや! つゝかまずなんでこの小説の主人公の俺が土度なんていうただの脇役なんだよ! しかも無限城編で一番目立たない役回りじゃねーか! !

しかもどうすんだよこの後の展開! どう考えたってパクリ過ぎだろ! このままだとこの小説はあの三角頭の意味わかんねー異界人が主人公の漫画とたいして変わらなくなるぞ!

いや! それよりひどくなるぞ!

「くそゝ! どうしたらいいんだ!」

そんな事を考えている間に一美が消えていた。

「いや、ほんとにどうすんだよこれ」

竜也の声は裏路地にしてはやけに広い道に寂しく響き渡った。

白はいいね。なんか純粹そうだしね。でも黄ばんでたらかなり引くな。(前書き

今日は特別つまんないです。でもまあ読んでほしいですね。評価もどんどんお願いします！

白はいいね。なんか純粹そうだしね。でも黄ばんでたらかなり引くな。

一人残された俺は行く当ても無く、ただただ歩き続けた。

「ここはどこでしょう？そしてなぜ私が土度なのでしょう……」

「ここは裏新宿です。何故つてもともとあなたはシドクンだったでしょう？」

俺の途方も無い答えにしろないこえがこたえる。

……ついに幻聴まで聞こえるか……

「どうしたのですか？無限城へは行かないのですか？」

また同じ声が聞こえる。気味が悪いからさっさと振り向かず走り抜けよう。そうさ、僕は風になれるのだから！決して後ろを振り向くのが恐いなんて事はない！さあ！早く無限城へ逃げ……向かわなくては！

そんな事を考えながら裏路地を走り抜けようとする、後ろから何かが俺の顔のすぐ横を通り過ぎる。

そんな事を気にせず走ると雫が頬を伝い、顎から落ちる。

それを拭いながらまたまた走る。

「無視しないで下さい。無視されるのは好きではありませんので」

そのような声が聞こえた瞬間、俺は壁にはりつけにされた。

みごとに服だけを貫き壁に刺さっているのは医療用のメス。

いや、さすがにこの体勢はツライね。だって動けないんだもん、動いたらメスが俺のびゅーちふるなお肌に傷を付けちゃうんだもん。

「で、無限城へ向かうんですよねえ？」

また同じ声が聞こえる。その声の方を見ると、真っ黒な帽子とコートを身に纏った……一美がいた。

「一美、お前ってそんなに悪趣味だったんだな」

俺がそう言う和一美はきよろきよろ周囲を見回した。

「……馬鹿にしているのですか？」「いえいえ！そんな滅相もない！ほらあの、ちょっと知り合いがいたような気がした

ので！」

「私の質問にはいつ答える気なのですか？
しまった！！

考える俺！自分の脳をフル回転してこの場をなんとか切り抜ける切り札を引き抜け！・・・・・・ドロー！！！！

「テメーナメてんのかオラァ！」

「黙りなさい」

突如空から大量のメスが降ってくる。

「ぎゃあああああ！」

俺はなんとか避けました！服を破り捨て、びゅーちふるすきんを諦めながらもあのはりつけからは逃れたのです！

・・・・・・しかし、なんでこうなるの！！？！！？俺なんか悪い事した！？

今俺は十字架にはりつけられています。

メスが俺の体中に刺さったところまでは覚えているのですがそのあとが曖昧です。

いくらなんでもこんな急な場面転換はちょっとツライね。

今この状況は、

「この男は、我社に送り込まれたスパイだという疑いが・・・・・・」

俺の目の前にいる髪形が逆十字というおかしな髪形をした男が演説をしている。

両脇にはどう見たってヤのつく職業の方が物騒な物を腰に下げてニタニタにやけていらっしやる。

・・・・・・オレピンチ？？

「やれ」

前にいる逆十字の男が低く重い声でそう言う。

「とーちゃん！！！」

どこぞのガキがそう叫ぶ。

とーちゃん？いや俺は子どもなんて持ってないヨ。つーかまずドー

テーだし。

すぱん

あれ？

ケシキガマワルヨ？

どか

アタマガイタイヨ？

メノマエニクビガナイドータイガアルヨ？

ネムクナツテキタヨ？

アツ，ジメンガマツカダ。

キレイダナキレイダナキレイダナキレイダナキレイダナ
キレイダナキレイダナキレイダナキレイダナキレイダナ
キレイダナキレイダナキレイダナキレイダナキレイダナ
キレイダナキレイダナキレイダナキレイダナキレイダナ
アレ？マツクラダヨ？

ナニモミエナイヨ？

アツヒカリダ

アツタカイ

デグチダ

眩しい。

美しい。

あっ！木がある。

綺麗な木だな。

あれ？木の根元に誰かいる。

たったったったったかたったた

「あれ？梨仔じゃないか。どうしたんだ？」

んっ？なんだそのホワイトボード。

きゅっきゅきゅっ

「へ」

きゅきゅきゅ

「ッ」

きゅっきゅっ

「ト」

きゅきゅきゅきゅ

「の」

きゅきゅ

「し・・・・・・・・・・」

ばたっ

・・・・・・・・・・空は綺麗だ。

そう思った途端どこからともなく声が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・じょ・・で・・か・・・・・・・・・・じょうぶ・・か」

うんうんうんうん。俺はもっと寝てたいんだ。起こしてくれるな。

「大丈夫ですか！！！？」

ぼやけながらもなんとなく目の前がみえてきた。目の前には逆三角形の謎の白い物体とそれより少し赤みがかかった白い物体が見えた。まあ十中八九人だろう。

「平気ですよ」

「ホントに大丈夫ですか？」

「はい」

「よかった。ピクリともうごかないから死んじゃったかと心配しましたよ」

「すみません」

「いえいえ、気にしないで下さい。でもよかった！慰謝料とか払う
ことにならなくて」

「……いやそっちなよ！」

「そりゃそうですよ！今野時代お金こそが、我が命ですからね！」
そういつてその人はニコツと笑った。

あつ！俺思ったことはそのまま口に出ちゃうんだった！

「そうなんですか！！？ 厄介ですねえ」

「そーなんですよ」

はぁ、気が滅入る。

「……それにしてもどうしよう。」

声からしてこの人は女の人だろう。

だからこそやばい。ぶっちゃけもう目の前のもやもやは解けている。
証拠にその女の人の特徴をお伝えしよう。

髪は茶色に近い金で、前髪が何本か目より下にいくくらいに伸びて
いる。

目は澄んだブルー。全体的に華奢な体を我が学校の制服が包んでい
る。

肌は真っ白で少し頬に赤みがかかっている。

かなりの美人

「どうしたんですか？」

「白、しろ、シロ」

「えっ？あっ！！きゃっ！」

バコツ

特徴に一つ追加。華奢な体つきに似合わず、超人的な力の持ち主。

俺は凹んだ校門に寄り掛かりながらそんなことを思い、意識を手放
した。

ちょっと遅れたけど家族達集結！お父さん来てないけどまあいいだろう！（前書き）

テスト等でかなり遅れてしまいました。すみません

ちょっと遅れたけど家族達集結！お父さん来てないけどまあいいだろ！

目が覚めた俺は自分の部屋のベットの上で寝ていた。

夢か。

イマイチ覚えてないが昨日見た夢はちよつと・・・“アレ”だった気がする。

「竜也く。ご飯だぞく！」

下からお母さんの声がする。

うん、いつ聞いても野太くてきくに耐えない声だ。

そんなことを思いながら下に降りると当然のごとく我が義妹のモンゴリアンチョップが襲いかかってくる。

「読めたわ馬鹿もの！！！」

そう言いながらしゃがんでモンゴリアンチョップを避けると、目の前から巨木のごとき太さの肌色の『なにか』が襲いかかってきた。

勿論俺はそれを顔面にもろに当たってぶつとんだ。

そして俺達はいつも通りの朝の挨拶をする。

「おはよう。糞で馬鹿で処女で間抜けでくれいずいーな妹こと舞華。今日もいつもどりのドメスティックバイオレンスぶりだね」

「おはようございますじゃなくてこんばんわですよ。愚鈍で最低で童貞でヘタレでどこかブレイクしちゃってる兄こと竜也。

ドメスティックバイオレンスって夫婦間での暴力のことではありませんませんでしたか？」

「そうだったけ？」

「たしかそうですよ」

「…………あれ？今更だけどさっき何かおかしなことを聞いた気がする。」

「こんばんわ？」

読者様達が間違えてしまいそうなので言っておくがエクスチョンマ
ークが付いてる方が俺ね。

「いきなりどうしたんですかへタレ兄」

あつ、夜なんだ。
（うそ

「こんや!？」

「いまよる!？」

「何叫んでるんですか変態兄、うるさくて思わず今流行りのバラバラ死体にしたいと思うのですがどうですか？」

しばし沈黙。

「すみませんお兄様。あなたはバラバラ死体にするには惜しい人物でしたね」

そう言って舞華は下を向いた。

「そうか妹よ！やっと兄の素晴らしさをわかってくれたか！」

「はい。わかりました。お兄様は」

そう言って顔を上げた舞華の顔は、鬼？いや鬼などではない。般若等生ぬるい。例えるならそう《無》。

そこには表情等なくましてや感情さえもない。

そんな死後の世界を人の形にしたものが目の前に立っていた。

「世界にある全ての死に方を体験してから裸体にして十字架に張り付けて鳥に食わせるべきでしたね」

ハイ♪・・・逃げよおおおおおう！！！！

自転車というガトリングを持った俺はまさに全物体最速！

ジョギングで風を抜き、スキップで音を追い越し、走れば光りに並ぶ俺に自転車というガトリングが加わった俺に追いつける者等いるだろうか。いや、いない。（反語表現）

「はーはっは！どうだ舞華！この俺に追いつけるか！？」

素晴らしいながら後ろを振り向くと・・・

「どうしました？お兄様？」

そこには舞華。

「ギヤアアアアア！！！」

俺は自転車に乗ったままぶん殴られた。

飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで♪ハイ
俺死亡♪

自転車の上だよ!? あいつ自分のことさえ考えないで俺のこと殺し
に来たよ!

「ま、舞華! 兄を労りなさい!!」

「労ってますよ。労っていじているだけです」

「意味ないよそれ! なんで労ってからいじめんだよ! 労って労って
労ってから労れよ!」

「労ってばっかじゃないですか」

「あたりまえじゃないか。この世界にいる全ての妹と弟は兄と姉の
ためになら命さえ投げ出さないとイケないんだよ」

「最低ですね糞兄貴。黙って今から朝までそこに寝ていてください。
きつとあなたが思い描くような美しい国へ行けますよ」

「うわっ! 冗談っーじねえ。こんな妹を持ってお兄さんは悲しいよ」
「.....」

あれ? いつの間にか舞華が消えてる。

トン

「人形の如く黙っていなさい」

舞華がそう言った瞬間俺はどさっという音を立てながら崩れ落ちた。

「あれ？」

「どうしました？糞兄貴」

「気絶じゃないの？」

「首から下が動かないように首を叩いただけですよ。ちなみに本気で叩いたら死んでました」

「うわぁ……。何しちゃってんのこの妹。さりげなく俺死んでたかもしれないじゃん。」

「大丈夫ですよ兄様。あなたはちゃんと生命保険に入っていますから。あなたがあちらに行けば保険料と慰謝料で私とお母さんはウハウハです。ちなみにお父さんもその後あなたの後を追いますから心配しないで下さい」

「……。舞華」

「なんですか？塵」

「いや、実の兄を塵とか言うなよ。少し所じゃなく傷つくから」

「わかりました。なんですか？埃」

「……。せめて生き物にしてください」

「わかりました。で、何ですか？醜悪で禿で糞で塵で埃でなにもかもがダメな地球上に存在しない生物H」

「なんか俺は一生舞華には勝てない気がする。」

「俺のことを醜悪で禿で糞で塵で埃でなにもかもがダメな地球上に存在しない生物H何て言ったらお前も醜悪で禿で糞で塵で埃でなにもかもがダメな地球上に存在しない生物Iになっちまうぞ？」

「大丈夫ですよ。私は義妹なので」

「……。あっそ」

こんな言葉を母さんと父さんが聞いたら悲しむだろうな。

「で、なんですか？」

「お前はもう少し我が家の男に普通の態度をとってくれ」

「やだ」

「なんで？」

「必要性がありません」

「そんな事言ったら俺がお前に暴力を奮ってもいいって事だな？」
「いいですよ」

「はっはっはっは！言っただけな舞華！明日からはヘルメットを常備することだな！」

「必要ありません」

ピシヤリと言われた。

ということは、なんだ？俺の方が舞華より腕っ節が弱いということか？

さすがに口では負けるが殴り合いなら負けない自信あるのだが。

「じゃあ！早速日頃の鬱憤を晴らしてもらおうぞ！！」

そう言いながらやっとな動けるようになった右手を振り上げ舞華に突進する。

しかし、不意に俺の足は止まった。

——舞華が泣いてる……？——

「ちょっ、どうしたん……」

「助けてー！！襲われるー！！」

一瞬呆気にとられた。

目の前には制服のボタンを残り二つというところまで外した舞華。

『ぶらじゃー』まで見えている。

舞華の肩に手を置いた俺。

周りの家々からは野次馬のように窓から身を乗り出してこちらを観察する近所の方々。

はっはっはっは。

そうきたかよまな板ガール！

「誰がまな板ガールですか？」

後ろにはまた『無』に戻ったどす黒オーラをぶちまける麗しき我が妹。

正面には俺が舞華を襲ったと勘違いし、『てめー何で俺もまぜなかつた』口が開いた途端にそう言いそうな周辺住民の男ども。

「てめー何で俺もまぜなかつた！」
うわっ。ドンピシャだよ！

「いや、襲おうなんて・・・」

「言い訳無用！！」

そう言いながら追い掛けて来る周辺住民達と鬼ごっこをしながら夜は深みを増していった。

なんのRPGだよ!?!お母様強すぎでございます!?! (前書き)

すみません! てきとーです! しかも一回投稿し間違いました!

なんのRPGだよ!?!お母様強すぎでいます!?!

ピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョ
ピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョ

「鬱陶しいわ!?!」

こんにちは、竜也です。

私は今朝から小鳥のさえずりを聞いてもなにもいいことがないという
ことを知った次第です。

ピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョピョ

「だから、うつせーよ!?!」

ドタドタドタドタ

今は亡きお爺様、今から私はそちらに行きそうでございます。

豪華な食事とまではいかなくとも茶菓子ぐらいは用意していただき
たい次第です。

「竜也うるさい!?!」

お玉を持った母が出てきた。

戦う

道具↑

必殺技

召喚獣

逃げる

道具

鉛筆

煙玉↑

剣のキーホルダー

竜也は煙り玉を使った。

竜也は逃げ出した。

お玉を持った母は見切った。

竜也は先回りされた。

「お母さんただけだよ！煙玉使ったのに逃げられないって！！」

「世の中思い通りにいくとは思うな！！」

戦う

道具

必殺技

召喚獣↑

逃げる

召喚獣

奈菜

一美

梨仔

舞華

デビルさん↑

竜也は謎の呪文を唱え始めた。

「唱えなきゃいけないの!!!?」

謎の呪文

マタアカハヤヌタナタカタイタカヌカナハナタナタナツナタナ
ヒヤナヤニマヤマヤカ

「……………マタアカハヤヌタナタカタイタカヌカナハナタナタナタ
ナツナタナヒヤナヤニマヤマヤカ」
しかし、何もおこらなかった。

「なんだよそれ!!!?」

あなたばかりじゃないですか？

「なんだとこらあ!!!」

召喚なんて出来るわけじゃないじゃないですか。

「…………その通りでございます」

お玉を持った母は竜也を哀れんだ。

「どおしたんだ竜也！いきなり意味不明な事を口走って！？」

竜也は精神に9999のダメージ。

目の前が真っ暗になった。

ティートゥーティティートゥーティティートゥーティトゥルルル

♪

黒魔術発動。一美からの電話。

竜也の攻撃力、防御力テクニック、愛、勇気、希望は全て500アップした。

「もしもし？」

「あれ？竜也？」

「そうだけど、どうした？」

「ごめん、間違えた！」

竜也の心に100000のダメージ。

「バイバイ」

さらに呪いにかかった。竜也は戦闘中攻撃ができない。

お玉を持った母は竜也に話しかけた。

「おーい」

竜也はただ呆然としている。

お玉を持った母は竜也の目の前で手を振った。

竜也は呆然としている。

「ダメだこりゃ」

お玉を持った母は逃げ出した。

日々楽々の今後についてのお知らせANDお詫び

すみません。手違いで母親VS竜也から後の話が全部消えちゃいました。楽しみにしていた方々には本当に申し訳ありません。

まあ最近……でもないですけど、ずっとおかしな方向に進んでたんでまあいいやと気を取り直して頑張っちゃいます。高校卒業後になりますけど。

もちろん次からは元のはちゃめちゃ変態コメディーに戻ります。

竜也と正二の変態度も元どおりです。つーか見直して思ったんですけど全キャラ性格コロコロ変わりすぎですね。ぶっちゃけ最初から書きなおしたいです。まあ困ったことに以前の感覚が取り戻せないんでどうにもならないんですけどね。あの時は衝動に任せて書いてたんでどうにもなんないんです。困った困った。

つーかあれですよ。もう片方の恋愛小説の方も読んで下さいよ。わりとあっちのほうが入力してるんですよ。もう少して二話目更新出来そうですし……。

ちなみにあっちは暇だったり受験勉強に手がつかないときにちよくちよく更新します。今書き途中の二話目がちよっと気に入っちゃってるんですよ。けどどんなか納得は出来ないんですよ。多分妥協してそろそろ出しちゃいます。

またまた話は変わりますが、卒業後は更に連載を増やそうと考えています。前消してしまった処女作の『クラス対抗戦争』をもっと現実的に、描写を詳しく書いてみようと思ってます。

後はまあ幾つか考えていますが、ここだけでなく、3年に入る前に建てたホームページに載せたりもします。

基本的にここにはコメディやラブなどの比較的軽い話を載せようと

思ってます。自分のホームページにはファンタジーやSF、その他もろもろを載せていきます。描写が詳しいのはあちらです。幼稚なのはこちらです。

では、また来年会いましょう。

ちなみにこのお知らせは残しときます。

白再び。痛いけどありがとうお姉さん。そして親父覚えてやがれ。(前書き)

お久しぶりです。いやほんとに。とりあえず今までの話を全面的に訂正してからこの次の話を投稿しようと思います。やっぱり執筆は楽しいなあと思う今日この頃です。

白再び。痛いけどありがとうお姉さん。そして親父覚えてやがれ。

朝起きて階段を下りると、そこには謎の巨木が横たわっていた。

勢いをつけて階段を下りていた俺は避けようと、必死に巨木を飛び越えたが、その先に仕組まれたように置かれた川○書店のブックカバーに着地。そして転倒。朝から再び眠りに落ちそうなほどの強い衝撃を食らった。

「クソ兄ちよつと今から指定する漫画を買ってきてください」

巨木こと舞華の膝を有する愚妹は、俺の眠りを往復ビンタによって妨害しながら、包丁を手に持ちそう言った。

……ブックカバーのトラップはそういう意味なのかい？ マイシスタ
ー。

「アッハッハッハッハ。久しぶりだな竜也！ 元気にしてたか？ してたよな。馬鹿が風邪をひくはずがない」

アッハッハッハッハ。久しぶりだな作者&読者！ いい加減忘れ去られたかと思っただぜ！

つーかうぜーよ親父！！ 金はまあまああるくせに馬鹿のせいで高校

に受からず、中退するしかなかったためーに言われたかねーよ!!

「は！甘い竜也！！360人中359位にまで上り詰めた作者の頭から捻り出された物語の主人公が馬鹿でないはずが無かろう!!」

「は！甘い親父!!」

「なんだと!?!」

「時代は移り変わるんだ。作者も今は名門と名高いH大を目指して日夜study hard中だぜ!!」

応援よろしくお願いします、読者の皆様。元が馬鹿でありますので、モチベーションを保つのに一苦労なのでございます。

「がんばれ作者ー!」

「周りから無謀だ無理だ正真正銘の馬鹿だと言われても挫けるな!」

おお！名も知らぬ通行人A・Bさん達からも応援が！

（こうでもしないとモチベーション上がんないんです。温い目で見てください）

作者よがんばれ！負けるな！打ち勝て！

閑話休題

ということで俺は母さんにパシられた父さんと買い物に行くことになった。

「親父」

「ん？」

「もっと威厳つーもんを持ちやがれええええ!!」

俺は必殺ウルトラシャイニングアッパーを放った。（右手が光るだ

けのただのアップーである)

「ぐびゃら!!」

親父は沈黙した。

……H A H A H A!! 俺悪くないよ。お父ちゃんが全部悪いんだよ。そうだよそもそも俺らをパシったあの悪魔どもが悪いんだよ。うん、俺は絶対悪くな

「白パンツ君じゃなあい。なにしてるのお？」

見知らぬ方がこちらに指を差しながら現われた。

美人なので出来たら俺に話し掛けていてほしかったので、期待を込めて首を捻って後ろを見ると、白い犬がヒョコヒョコ歩いていた。
ド畜生! 犬ごときが美人さんに愛されやがって! 俺は犬にも劣る身なのか!?

「突然踊りださないでよう。気持ち悪いなあ」

コノヤロウ。成敗じゃ成敗。犬畜生め。人間たるワシ自らその脳髓に鉄槌を下してやろうぞ!

「コラコラア。無視しないでくれないかなあ」

死ねえい! 彼女いない歴〓年齢の恨み、思い知れ!!

「女の子をお無視する男はあ死んだ方がいいと思うよお」

どかつと俺の経験上あまり良くない事が起きる音がした。というか

物凄く良くない音がした。

「あの、視界が真っ赤に染まってるのですが……」

「まあそれは置いてえ、何してたのお？」

置いてしまいましたよ！この人自分の犯罪無理矢理誤魔化そうとしますよ！！

「あなたもお人のパンツ見たんだからあおあいこでしょお？」

俺の悪癖はいまだ直らないようだ。そろそろ意識しないといろいろとやばいかもしれない。

「ところであなたはどこのどちらさんでしょうか？」

「人に名前を聞くときはあ自分から名乗るものですよお？」

これはやはりあれだろうか？パクリ大好きな作者の近頃顔が丸つくなつて、ファンシーさの度合いが増えすぎなことになってるひとつなぎな大秘宝の花びら頭の灯台守さんのパクリだろうか？

「早く言いなさいよお」

嫌な音再び。

「ぐびおあ！！？」

痛いです！痛いですよお姉さん！！さっきので罪は相殺されたのではないのですかっ！？

「覗きの罪はあ死刑でさええ生ぬるいのですう」

「あんただんだけ性犯罪に恨み持ってんですか！？死刑以上の刑罰

なんて存在するんですか!？」

「試してみますう？」

「謹んでお断りします」

俺は神の如き速さで土下座した。

「しろ、しろ、白」

その声でフラッシュバックする避ければいいのにそのまま突っ込んできた自転車、一美が変な格好している夢、超怪力。

「思い出し」「いやあああああ!!」

超怪力再び。俺は謎の美人さんに殴り飛ばされた。

薄れ行く意識の中、ニヤつくクソ親父と前蹴りのせいでスカートの
中丸見えな美人さんのスカートの中身が視界の端に映った。

とりあえずクソ親父。起きたら母さんに言いつけてやる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088b/>

王道

2010年11月24日10時34分発行